



御幸公園梅香事業推進計画 概要版

計画の推進体制

☆市民が地域への愛着を持ち郷土の歴史や文化を継承していくためにも、各取組において市民との協働で事業を推進していく必要があります。

☆町内会・自治会、企業、市民活動団体、教育機関、行政が協働・連携し「御幸公園梅香事業推進会議」を中心とした仕組みづくりが必要です。

項目	協働のイメージ
計画づくり	地元町内会や老人クラブ、子ども会代表、企業、観光協会等からなる「御幸公園梅香事業推進会議」で協議・検討
梅林植樹	寄附・募金による植樹
企画運営	各種イベント等について、市民参加による実行委員会を設置し運営
維持管理	市民協働による梅林の維持管理（仮称・うめクラブの設置）
進行管理	「御幸公園梅香事業推進会議」で進行管理

小向梅林の歴史について

<暴れ川多摩川>

急流河川である多摩川は洪水のたびに流れを変え、現在に近い流れになったのは16世紀末と言われています。江戸時代には平均6年に1回の割合で洪水が発生し、耕地等に損害が出ていました。慶長16(1611)年に二ヶ領用水が完成し、川崎市域の耕地面積は飛躍的に増加したものの、小向村の耕地面積は変わらず、多摩川沿いは依然として洪水に見舞われていました。

<観梅の名所>

明治13(1880)年2月、朝野新聞に成島柳北が「小向村探梅ノ記」を連載し、その後、同紙面に多くの歌人・文人が寄稿したことで、小向村は一躍梅の名所として有名になりました。

「小向村探梅ノ記」には、「新橋からそう遠くないところに一大香の世界あり。小向は一村すべて梅である。人は杉田の梅を称賛するが、杉田の梅はそれほど多くなく点在している。小向は、梅の林が群生し幾重にも続いており、開花の時期にはそれが白雲のように見える。」とあり、当時の小向梅林の様子がかがえします。



写真：小向村の梅屋敷
「川崎市史 通史編3」より

<梅の生産地>

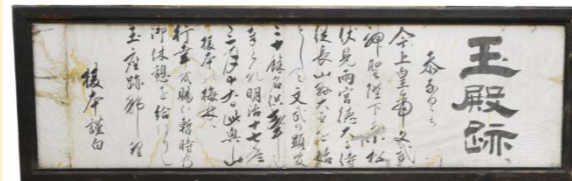
梅の木は多少の浸水にも耐えることから、小向村では江戸時代の寛文年間(1661年～1672年)ごろに換金作物として植えられました。

明治初期には、塩漬(梅干し)として加工した物は東京及び横浜の漬物屋へ、青梅は東京本所の青物市場や横浜青物市場に出荷されていました。

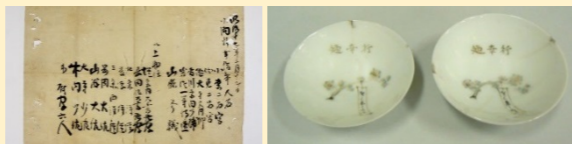
<明治天皇の行幸>

明治17(1884)年3月19日、明治天皇は30余名の高官を伴い、行幸されました。

到着後の明治天皇は、梅林内の「奥山榎本」(茶店)に作られた御野立所(おんのだてしよ)の玉座で御観梅、御小宴されました。その場所は「玉殿跡」と呼ばれ、梅林の中の名所となりました。



↑写真：扁額「玉殿跡」(市民ミュージアム所蔵)



↑写真：「小向行幸供奉人名」(市民ミュージアム所蔵) ↑写真：盃「行幸廻梅」(市民ミュージアム所蔵)

<梅林の盛衰>

小向の梅は、江戸時代に小田原から運ばれ植樹されたとの言い伝えがあり、一時約30町歩(約30ha)を占めるまでになりました。

明治4(1871)年の多摩川の洪水で、梅林は7町歩5反(約7.5ha)まで減少し、その後も洪水や梅が老木となったことにより縮小を余儀なくされました。明治37(1904)年ごろ、残った梅の木も実が結ぶことが少なくなり、すべて伐採されるところでしたが、それを憂いた原三溪により、700株が横浜本牧の三溪園に移植されました。

<行幸の碑>

明治天皇の休憩場所(玉殿跡)には、昭和6(1931)年に「明治天皇臨幸御観梅跡碑」が増山周三郎らにより建立されています。碑の右面には「明治十七年三月十九日行幸」と彫られています。



↑写真：明治天皇観梅跡の碑
「川崎市史 通史編3」より

計画策定にあたって

<計画策定の背景と目的>

小向梅林は、かつて明治天皇が行幸するほどの観梅の名所でした。御幸公園には明治天皇臨幸御観梅跡碑とともに小さな梅林が当時の名残を留めています。

幸区の魅力であり資源である梅林を市民と復活させるとともに、御幸公園が憩いの場、集いの場となり、地域コミュニティの活性化につながることをめざし、市制100周年である平成36(2024)年度に向けて梅香事業推進計画を策定します。



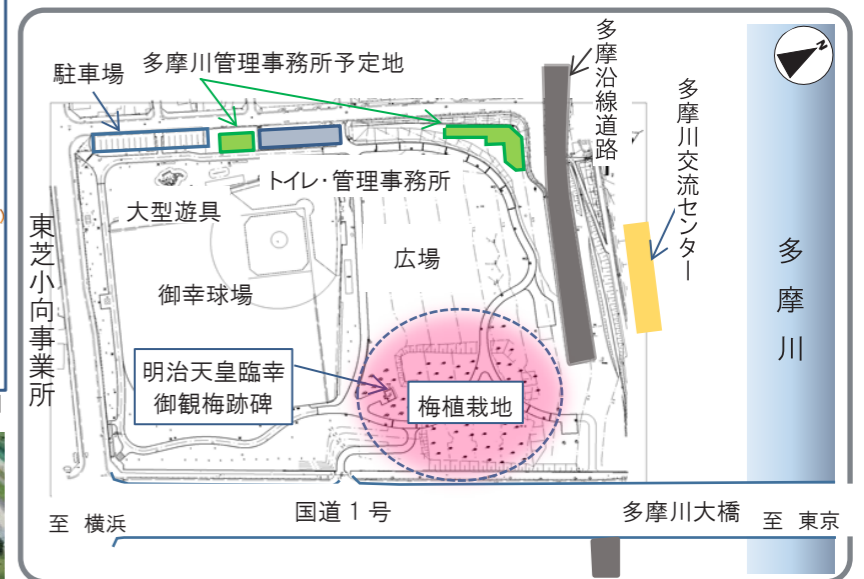
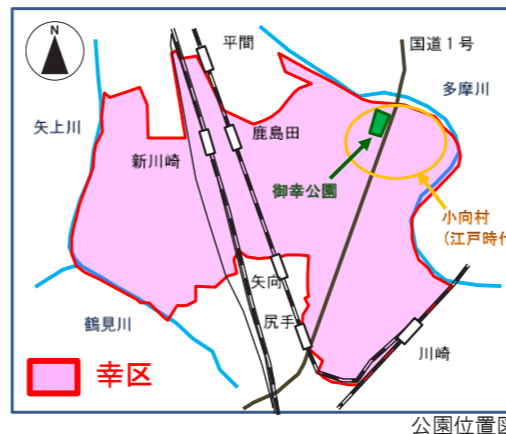
<計画期間>

平成27(2015)年度	平成28(2016)年度	平成29(2017)年度	平成30(2018)年度	平成31(2019)年度	平成32(2020)年度	平成33(2021)年度	平成34(2022)年度	平成35(2023)年度	平成36(2024)年度	平成37(2025)年度
梅香事業推進会議の発足	計画の策定						事業推進	区制50周年	市制100周年	
							計画の見直し			

小向梅林と御幸公園

小向梅林は、幸区の中央から東よりの北端に位置し、大きく湾曲する多摩川に接して、国道1号の多摩川大橋下流にありました。

御幸公園は平成22(2010)年から行われた堤防工事により現在の形状となり、その際に梅が植え替えられました。その後も補植を行い、平成28(2016)年4月現在、梅の本数は54本になっています。



計画の基本的な方向性

<計画の基本的視点>

幸区の魅力であり資源である梅林を御幸公園に復活し、市民の地域に対する愛着を深め、憩いの場を創造し市民とともに地域コミュニティの活性化を図るため、3つの基本的視点によって検討を進めました。

1 歴史の「継承」

2 梅林の「復活」

3 世代を超えた「市民協働」

<計画の基本目標>

(1) 魅力の発信

「幸区」の名称の由来となった梅林を地域の財産として、市民の愛着が深まるよう、地域の魅力発信に努めます。

- ・写真展の開催、梅まつりの開催
- ・「区の木・梅」の制定 など



明治天皇行幸之蹟碑
(幸町交番付近に現存)

(2) 歴史・文化の伝承



歴史講演会の様子

地域の歴史を知り、地域への愛着や誇りを育むことができるよう、歴史や地名の由来についての講座・講演会を開催するなど、学ぶ機会を創設します。

- ・講座・講演会等の開催



(3) 梅林の復活

御幸公園の梅林が観梅の名所となるよう、また地域のシンボルとなるよう梅の植樹を進めます。梅林の復活にあたっては、事業連携や各種団体からの助成を用いるとともに、市民からの寄附・募金など様々な手法を導入します。

- ・梅林の整備
- ・様々な手法による植樹の推進

植樹の手法

- ・『うめかおる寄附』『うめかおる募金』制度の創設(梅植樹のための寄附制度)
- ・市民 100 万本植樹運動等との連携
- ・河川財団助成金の活用



市民 100 万本植樹運動植樹祭の様子

梅林整備の考え方

- ・花を長く楽しめるよう開花期の異なる品種を植える
- ・実も花も楽しめるよう、実梅と花梅を植える
- ・南側は、小向梅林で栽培されていた白梅中心、北側は華やかさを意識し紅梅中心とする
- ・植栽間隔は 4~5m、合計 180 本程度を目指す



かつて小向梅林で栽培されていた品種を主とした白梅中心のエリア

華やかさや見応えを重視した紅梅中心のエリア

(4) 梅林の活用

御幸公園の梅林、梅の果実などを活用した様々な取組やイベントを市民と協働で推進し、世代間交流や地域コミュニティの活性化に努めます。

- ・梅の実の活用、梅まつりの開催 など



(5) 梅林の保全



剪定講演会の様子

御幸公園の梅林の維持管理については市民との協働による研究や維持管理活動を行うことが重要であり、市民による管理運営の手法を検討します。

- ・協働による維持管理
- ・梅の木の保全対策



(6) 次世代への継承

学校教育等と連携し、御幸公園を活用した取組やイベントを実施し、総合学習等で梅林の歴史などを学び記憶に残すことで、次世代に受け継いでいけるよう取組を進めます。

- ・学校における梅の学習
- ・絵画コンクール等の実施など

校章に梅の花のデザインが用いられている幸区内の小中学校



御幸小学校



南河原小学校



西御幸小学校



戸手小学校



古川小学校



御幸中学校

(7) 公園の利用促進

観梅やイベントのほか、公園機能としての広場や散策路の整備、健康増進関連施設の充実を図ります。

- ・散策路等の整備
- ・健康増進関連施設の整備
- ・広場の改修
- ・広域防災拠点としての活用



散策路(イメージ)



健康増進関連施設の例
(背のばしベンチ)